

村上二郎著作集 第一卷

村上一郎著作集 第一巻
東国の人びと

1996年2月25日 初版第1刷発行
定価9785円（本体9500円）

著作権者 関谷真理子◎

発行者 前島 淑

発行所 国文社

東京都豊島区南池袋1-17-3

電話 03-3987-2865

振替 00180-7-195058

印刷 長野印刷

製本 並木製本

ISBN4-7720-0315-0

村上二郎著作集

第一卷

監修

吉本隆明
金子兜太
桶谷秀昭

国文社

村上
一郎
著作集
第一卷
目次

東国の人びと

第一部 阿部隈郷土

第二部 天地幽明

第一章 224

第二章 325

第三部 冬到る

第一章 425

第二章 速水鐘太郎の独白

草稿断片

草稿断片について（桶谷秀昭）

538

解説 奥野健男

解題 樋口 覚

8

224

425

519

537

569

581

村上 一郎著作集 第一卷 東国の人びと

東国の人びと

第一部 阿武隈郷土

君主に強兵のあるところ、かならず良友がみいだされるものだ。

マキアヴェルリ

一

朝霧がしっとりとして立^{たちこ}罩^もめている黎明の大気をゆすって、守山陣屋の門が重々しく開かれると、数人の小者が走るように、昨夜の小雨にぬれた街道へ散っていった。お陣屋に何かある、早起きの町家^{まちや}の者たちが大戸^{おおど}を上げる手をとめて噂しあううちに、「下に……」という声がして、大手の濠に長柄・鉄砲の影を落しながら、いかめしい供揃えを従えた乗馬の侍が、須賀川^{すかがわ}の方へ向って打たしていった。ふた月前、あわたたしく成立した奥羽^{おくう}（越^{えつ}）列藩同盟^{れつぱんどうめい}の盟約にしたがい、須賀川宿に駐留している仙台の軍監が、すでに白河・棚倉両城を奪ってさらに北上の気配をみせている維新政府軍の錦旗を迎撃すべく、ともすれば戦機に立ち遅れがちにみえる守山藩の督戦に乗り込み、この日しらじら明けてまで軍議を開いていたのである。

守山藩は水戸三十五万石の支藩の一つで、この奥州田村郡守山近傍と、宗藩に近い常州^{ひぬま}潤沼沿岸の林川陣屋周辺と、あわせて二万石ほどの封土を領する小藩で、領主松平大学頭^{だいがくのかみ}頼升は自身領地に下ることもほとんどなく、郡奉^{こおりぶ}

行・目付など、少数の家来たちが地侍を指図して、地方の支配に当たっていたが、この年慶応四年戊辰の春、徳川幕府の瓦解以来、年寄役以下江戸詰の侍たちがぞくぞくと封地に帰るとともに、ものものしい戦備をととのえて、会津・仙台南藩主戦派の領導のもとに、奥羽越列藩同盟に加わり、傾きつくそうとする藩の運命を賭けて西国雄藩の独占する維新政府に反抗しようとしているのであった。

もはや七月朔日。

落地へもどされ封禄も削られて生きる道を喪った侍たちに他のどんな打開策も見出されなかったのである。

郡奉行の名で、領内下郷一帯の庄屋・郷土の子弟に動員を命じる令状を預った小者たちは、城下のはずれ山中明王の社の前で三方に分れると、その一人は鞋の足をひたひたと、阿武隈の河岸段丘の上に蔽いかぶさるようひろがっている杜の小道に向けた。まだ闇を残している高い梢に、朝風は簫のように鳴る。この杜をぬけて、明王の社頭から三里ほど北に当る、南泉田の村に、小者の足が急いでいったのはその朝七ツ半刻（午前七時）を少し廻った頃であつたろうか。だが折悪しく、令状を受ける庄屋の嫡男右馬允は、早朝から父の亮作に代って、阿武隈の対岸、出河原と呼ばれる入会地へ草刈場の検分に出張っていて留守であつた。出河原は、隣藩二本松の支配下にある陣場村と地つづきで隣りあっているために、その境界をめぐる両村の争いが、長年にわたつてくりかえされてきたのである。

阿武隈川は、南泉田の小さい村落がその上に散らばっている段丘の横腹をえぐり、一転して対岸の出河原を抱えこむように大きく蛇行を試みながら、北国の季節が盛夏から初秋に向ってあわただしく傾きだす頃に特有の、白々とした厳しさをたたえて、一筋北へ走っていた。この流れが守山藩領の西の境をもなしているのである。川の尾の輝きが鈍く消え去ってゆく彼方には安達太郎山が広い裾を拡げていて、そこに生みだされる信達（信夫郡・伊達郡）の豊かな平野が、古くから奥筋とよばれ、仙道七郡の中樞をなしていたことは人の知るところであるが、川をへだてて眼の下にこの要路の一端郡山宿を扼し、背に阿武隈山系の峰々を負った下郷一帯は、その位置

と地形からして中世以来軍事上の要衝の一つにも数えられてきた。だから、後に判るように、当時白河・棚倉の間にあって敵地の情報を蒐集しつつあった政府軍参謀板垣退助・伊知地正治らが、よくこの阿武隈右岸一帯の戦術的価値を見誤らず、太平洋岸に上陸した海道軍と呼応して、長駆、信達の機業地を羽翼に収め、短期間に西の会津を孤立に陥れようとする企図に到達したのは、たしかに彼らの敵・列藩軍の知囊にくらべて一段賢明であつたといえよう。けれども、これをあたかも兵学上前人未到の発見でもあるかのように讃美したがる明治の伝記作者の筆に倣うのは、果して如何なものであろうか。古く南北朝鮮時代、阿武隈山麓に足場を固め、奥筋を切取ろうと努めた北畠父子の例はしばらくおくとしても、下つて戦国の末期、夙のように北から動いて、阿武隈沿岸の要衝を奪いながら会津攻略の礎石を布いていった伊達政宗の侵略は、陣場の地名でもしれるようにこの土地に深くしみついた記憶を残していた。一つまた一つと落してきた沿岸の拠点の、最後に残る須賀川攻めの手配りもついた初秋の日、よしきりの鳴く陣場の河原に愛馬の脚を冷しながら、小手をかざして入日の落ちてゆく方を仰いだ政宗の眇目には、いまでも同じ会津境の山々が、まだ若い戦国武將の止みがたい欲望をそるように莊嚴に照り映えていたのであつた。領土の掠奪に、何のやましさも、賤しさもともなわない時代だったのである。

天正・文祿の交といえ、名の知れた大河には、まだ水門も整わなければ大規模な石組みも行われてはいない。奔放に押流される阿武隈中流にも、後の世の者には思いもよらぬ早瀬の難場が多かつたが、その間隙をぬって見出される渡河点に備えたとおぼしく、段丘の縁に点々といまも残る城寨の跡は、この秋伊達の遠征軍に蹂躪されるまで、芦名・佐竹・田村などの党が拠りあい奪いあつた古戦場であり、田村ノ莊六十六郷の住人たちが川風に母衣をふくらませて馳駆した名残のあとでもあろう。だがこうして仙道七郡から会津をまで傘下に収め、はるか南欧に使節を派遣するほどの富を誇つた奥羽の覇者も、いち早く国内統一の時代を予見してか、小田原陣の豊太閤に降ると、太閤は会津一円を伊達から取上げて蒲生氏郷を会津黒川に配すると同時に、阿武隈沿岸の要衝もすべて蒲生領に編入し、奥筋を押えさせる用意を忘れなかつた。かくて須賀川は蒲生の部將として聞えた田並中

務少輔^{つかせうぼう}が入城する。伊達方と目される旧い代官どもが追われ、その砦のあとに夏草の繁りだす頃、早くも村々には「御用」の旗がはためき、西国から下った奉行には厳しい棹入れを行った。「百姓以下^{いげ}に至るまで行届かざるに付ては、一郷二郷といえども撫で斬りに仕るべく……」と、太閤の朱印状は奉行を督励していたのである。

或る朝、川べりのひどろ、田の検地にかかろうとしていた奉行の旗差物を目印に遠矢が射込まれた。はッと鞍に身を伏せた奉行の笠をかすめて、側の松の根がたにグサと突立ったその大ぶりの矢を抜かしてみると、矢文^{やぶみ}が結んであって、所領安堵^{あんど}の許されぬからは、われら先祖の名を重んずる下郷^{しもごう}住人は一人となるまで刃向い申すべしという挑戦状であった。山狩りが始められた。阿武隈山脈の入りくんだ支派の中で、地理にくらい西国武士たちはしばしば翻弄された。が、彼らに朱印状を下した新しい権力者の意志は絶対であり、いささかの手加減も許されなかった。山に籠って野武士となった反逆者たちは、新しい代官の下で面従腹背をつづけている沿落名主^{みよしゆ}たちを味方につけ、河畔の村々を襲っては、須賀川城へ運ばれる貢米を奪いとり、あるいは西国流^{さいごく}の縄張りで築かれた新堰^{せき}をこぼちなぞして、執拗な抵抗を試みはしたが、それも長くはつづかなかった。郷村を離れ、耕地を離れての戦いは苦しすぎたのである。やがて彼らの子弟や下人の中にも、村へ偵察に下る折見かける百姓たちの新しい境遇を羨やみ、しだいに草賊と化してゆく自分たちの山暮しを呪う者がでてきた。——中世は、終わったのである。

弓矢を捨てた住人たちは、霊地として怖れられてきた杉山にも斧を入れた。会津黒川（若松）に築かれる鶴^ガ城のために猷木しなければならなかったのである。或いはまた、年のはじめともいえば、あの鬱屈を罩めて入日に輝く会津境の山々を越え、村ごとに竹棹に下げた雉の一かけに人足をまで添えて年始の礼に差出すのが例ともなった。雪深い中山峠に行倒れて、帰らぬ者もあった。だが、やがて成立した徳川新政府のさらに強大な権力は、太閤に東国の鎮台と頼まれた鶴^ガ城の主たちをも逐い、この沿岸もしだいに会津城主の支配から収めとられて、天領や親藩領に再編される。あわただしいお国替^{おぐがえ}の触れ出されるたびに、下郷の領民たちは、新旧の主人の莫大

な入費を負わされ、また新たな奉行どもの入れる棹の厳しさに目くらむ思いを重ねるのであった。一段と進んだ世の中の村々を支配するものは、二カ村三カ村の知行をとる代官や給人ではなくて、その姿を仰ぐことさえ許されない一円領主その人であり、整備した藩機構であった。千代田の城の奥からする脈絡一貫した支配体系が、数十里の山河を隔てたこの村々の上にまでのしかかってきたのである。こうして、阿武隈東岸二十余カ村は、最後には水戸家から分れた守山藩の領地と変る。その川沿いの細長い三角堡は、対岸の二本松領と山ぎわの三春領との間に奥深く喰い入っていた。それは、今日でこそ幕府瓦解の日を待たず子の年（元治元年）の天狗騒ぎを頂点とする藩内の党争に傷つき果てて、昔日の勢いを喪ってしまっではいるが、かつては神君家康が世々將軍家の懐小刀ふところがなとたのんだ水戸藩の、奥羽五十余郡に向かって打ち込んだくさびにも似ていた。

いま、初秋の色のあざやかに動く河岸段丘の上に陽を浴びて寄りあっている南泉田の部落の中心に、これも中世には聞えた砦であつたに違いない名残を、ひぐらしの降るように鳴く木深い屋敷林や、くずれた石垣のあたりに止めている庄屋屋敷。——この屋敷とその住人とがへてきた偽りない歴史は、部落の先祖たちがここに居を占め村をなしていった最初の日々とともに、もはやつまびらかに追うことはできない。だが、村の伝える文書の一つは、慶長の頃、南北両泉田の高百七十七石なにがしを田地八つにうち分け、はじめて肝煎きまぐりを選び肝煎免きまぐりめんの田畑を定めた言い伝えを記していて、そこに名の残る肝煎役権堂和泉ごんどうわいずみとか、その子掃部かみんとか、いかにも名主みよしゆの末らしい名の人こそ、亮作・右馬允の祖先といわれている（武田家は本姓を権堂と称した）。つまりは武田家の先人たちは、あの徳川初期、かつてない強力な支配力がはじめてみちのくの隅々にまで滲透して来る時に、もうすでにこの風荒い江東の一角に「おやかたさま」とうやまわれる主人の座を占めおおしていたことになるわけである。

だが例えば、河風に吹き弄ばれる雑草の種子が、日照りの烈しい砂礫まじりの地表に転々とするうち、並ならぬ一つの必然に貫かれた根を下し、芽を吹き茎をもたげ、やがて花をつけ実を結んで、聚落をなしてゆく年月を思ってみるがよい。自身のつくりだした腐葉土を、厚く砂礫の上に積みあげ積みあげつつ、かつてはひたすら環

境に順応するはかはなかつた移民の境遇から、ついにはみずからの小天地をつくりなし、まごう方ないその主人の座についてゆく、そうした営みを追ってみるがよい。さらには、かくしていったん主人の座を占めた種族の聚落に入りこんで、ふとその先入主たちの蔭にいのちを開きだす別系統の植物が、しばらく日蔭に耐えて息をひそめているとみる間に、やがて主人の座を侵して繁茂しはじめようとする、荒々しい地表の格闘の様相をも想ってみるがよい。――部落をなし村をつくる、それだけの営みの一つ一つにも、なまなかな観念で迎えることのできない複雑な因果がからみあっている歴史の中で、八つの割地が十になり二十にふえ、その上に武田の屋敷の揺るぎない土台も据えられていったものであろうか。藩の取扱いも、常にこの旧い家筋を軽んじはしなかった。ことに、明和から寛政にかけて長く庄屋を勤めた弥市という人が、つぶれた百姓の続出した天明凶作の後、八方奔走して上店に売込める良質の蚕種をつくり出し、荒地を本出に立帰らせ人別家数をも増していった功によって苗字帯刀を許され、袴着用の誉れをも担うようになってからは、武田家も領内の庄屋仲間で名門と聞える家格に上る。すでに幕末に近く亮作が家を継いでからは、藩財政が窮乏するほど、地方役人の武田家に対する依存の度も大きくなり、代りに与えられる特権の数もふえた。文久二年、当主の大学頭頼升が襲封した時の御国恩金献上に対しては、父子代々勤農役を命ずる書付が下ったし、元治二年（後の慶応元年）には、藩の兵制改革に際して百目筒一挺に添えて鉛・硫黄を献じた功で御山横目格に昇った。そんな栄誉とその蔭での負担の度重なりが、後になってみれば武田一門にとつての幕末の近づく先触れであったともいえようが、亮作は献金の内命が伝えられるたびに、蹠毛をしばたたきながら、

「――まさか、嫌だともいえなかんべえ」

多少得意でなくもない風にいうのであった。だから、去る閏四月の或る日差紙を受けて守山の陣屋に出頭した息子の右馬允が、非常の時節につき他日藩が出兵に及ぶ際は、戦士として召出すから左様心得よという、年寄役直々の申渡しを受け、陣羽織一領と支度金二両とを貰って帰って来た夕べにも、父の亮作はそれを晴れがましい

名誉として、出入りの者たちに披露したものである。

「礼吉よ」亮作は、自分の昔の幼名をそのまま継がしてやってある右馬允の長男を、膝近くひき寄せながら目を細めていった。「お前のお父っあんは、今度っから守山藩の戦士だ」とよ」

そして、父の見慣れぬ衣装の黒ラシャの縁どりをした襟を、きょとんと見あげている孫のあどけない顔を、さも満足そうに見やって、

「ほおれ、大した陣羽織でねえか。ハッハッハッハッ……」

——今から見れば、まだ奥州の情勢にもゆとりのあった頃で、三百年来の中央の羈絆を脱した東北三十藩の力で、新潟貿易が莫大もない利益をあげ、五十余郡の民にもうるおいが齎らされるのだと、夢のような伝聞さへ行われていたくらいだったから、亮作の息子を祝い家を讃える喜びの声は、冬窓を開いた夕ぐれの屋敷内に、春らしい明るさをただよわしもしたものだだった。

その心根に附けこむように、藩は追かけて老庄屋自身を郡奉行所へ召出し、かねて武田家が切望していた阿久津境の桑園開墾のもくろみに内諾を与え、さらに奉行みずからの手で、新聞の畑地三百畝永代下され置かれるという特別のお墨付を授与した。現に右馬允が検分に赴いている、その出河原の畑地である。

二

あらかじめ沙汰こそ受けてはいたものの、いよいよ今日が右馬允の出陣の日であることを、真先に知ったのは、やはりこの老庄屋自身であった。亮作は今朝も、普通役宅と呼んでいる表座敷の庭先へ出て、この二、三日衰えを見せ始めてはいたが、まだ日中の残暑の厳しさを思わせる朝日影に向かって、矢羽根に似た梢をいっぱいに仰している満天星の垣から、胸先を乗出すように、目の下の四ツ辻を見下していた。

——あの道も何とかしなくてはなんめえ、と、亮作は口でつぶやいた。雨の多い年で、やっと六月も半ばになってカッと陽の照る日がつづきはしたものの、四ッ辻の高礼場の前にできた大きなぬかるみは、いまだに乾き上ってはいないのである。あれでは、また秋出水の頃には通行も困難になってしまうに違いない。先頃、戦に備えて行われた郡奉行の川筋検分の折、注意のあったことも気になっていた。それに、亮作は中年の頃から道普請に凝りだし、右馬允に手伝わせて自身測量などしては、新しい村道をもすでに幾つかつくっていた。そのたびに使役に出る村人たちの、蔭へ廻ってという不平が耳に入りでもすると、亮作は、何時もいったものである。

「いっとう損してんのは俺ら家だんべえ。今度つぶした田だら、二俵はしっかり上っかん」
そういわれると皆黙る他なかった。

——だが、こう軍役さ取られてる際では、と、さすが亮作も百姓どもの手不足を考えざるをえない。今朝も、此処には、軍役人夫の要求に応じて、守山・須賀川方面に出してある村人たちが、一部交代の嘆願を認められて帰りつく筈で、亮作も四ッ辻まで迎えに出てやるつもりでいた。三十年庄屋を勤めてきた老人の経験では、苦役に疲れて村へたどりついてくる者たちを、自分が先に立って迎えてやるのが、何よりも大切であった。別にお世辞もねぎらいの言葉も要らない。ただ村を預る庄屋の自分が、穏やかにその者たちの顔色を見つめてやることなのであった。何時頃からの呼吸を大切に思うようになったものか、亮作も実は深く考えてはみない。しかし、切迫した戦の噂も、拡がってゆく世間の動揺も、はては守山の間屋や伝馬役に対する不平不満のあれこれも、皆その者たちの帰りついた時の気持そのままに、村中へ流れてゆくのである。特に亮作にとって、村人に聞かせたくないのは他の宿村にふえた不逞の徒の動向であったが、それを怖れてみたところで、人の口に戸の立てられないことも、この四、五年の世相が教えていた。地方の在所が、広い世間から隔てられ鎖されていたのは、もはや昔のことであった。愚鈍といわれていた百姓小前の耳も、川砂の水を吸うように、すぐにすべても知りつくしてしまふ。いや、今まで鎖されていた耳ほど、すべての出来事の詳細な顛末をむやみやたらと知りたがるものだった。